

インドネシア

—多様な知の集積地—

土佐 美菜実

●はじめに

ここ数年、インドネシアの本屋市場は、ジャカルタなどの都市部を中心にショッピングモールの建設ラッシュとともに大型書店の寡占状態が目立つ。こうした大型書店の拡大が加速するインドネシアにおいて、古本屋はどのような状況にあるのだろうか。本稿ではジャカルタ、ジョグジャカルタというインドネシア二都市における古本屋事情の一端について紹介していきたい。

●ジャカルタ

ジャカルタではもともとクイタシオンという地区に古本屋業者が集まり、賑わいをみせていた。二〇〇八年頃、彼らの多くが南ジャカルタのブロックM地区へ移り、今ではこの地区にあるブロックMスクエアという老舗の商業施設の地下

街に店を構えている。洋服やアクセサリー、お土産品などを売る店に混ざりながら、ところ狭しと本を並べている。子ども用の本や漫画から、辞書や語学教材に至るまで、売られている本のジャンルは様々である。地下街へ降りるエスカレーター付近にも「安い本の取引所」と記されており、本が安価に入手できる場所として役割を担っているようだ。

こうした古本屋の集積地がある一方で、特定の場所で一軒だけで古本屋を営む店もある。ジャカルタにはタマン・ミニ・インドネシアと呼ばれる国内各地方の伝統的な家屋を再現した広大な公園があるのだが、この敷地内に店を構えているのがパサール・ブク・ランカダ（写真1）。一九八〇年代、先代の店主（今の店主のお父さんにあたる）の頃に当時の大統領夫



写真1：タマン・ミニ内にたたずむ店舗（筆者撮影）

人、すなわちスハルトの妻シテイ・ハルティナに本を売ったことが縁でこのタマン・ミニ内に古本屋を開業することができたという。お店は平屋の一戸建てで、店内の本棚には歴史や文学、伝記を中心に取り揃えており、一九六〇～七〇年代に書かれた人文・社会科学分野の古い本も売られていた。この主な客層は欧米を中心とした海外の図書館や大学・研究機関の関

係者であるという。こうした海外の顧客への販売ルートはすでに先代の頃より確立しているようで、相手の機関に合わせて本のリストを予め作成しておくなど、購入者ごとのニーズに合わせた対応もしている。

もう一軒は劇場や映画館などを備えたジャカルタの複合文化施設タマン・イスマイル・マルズキの一角に店を構えているギャラリ・ブク・ブンクル・デクラマシである（写真2）。創業者でもある現在の店主が一九八〇年代にニューヨークのブロードウェイでみた古本屋から着想を得て、当時まだジャカルタに一軒もなかったことから、古本屋を自身で開業しようと考えたのがきっかけだった。店内は独特の配置で本がぎっしりと積み上げられており、目当ての



写真2：店内は独特の配置で本が積み上がっている（筆者撮影）



写真3：コンプレックス内の様子（筆者撮影）

● ジョグジャカルタ

ジャワ島南岸に位置するジョグジャカルタは、周辺に数多くの古代遺跡が残るインドネシアの古都

本をお客が自力で探し出すには希望が持てないような構造になっている。店主はもとも舞台監督を務めるなど、文化や芸術の分野で活躍しており、店の本も主に芸術や文化、文学系のもが多い。しかし、それだけではなく歴史や政治に関する本も広くカバーしている。先のパサル・ブク・ランカと同様に買いに来るのは欧米の図書館関係者が多いという。

このようにお店の常連の多くが欧米を中心とした海外の図書館・大学関係者であり、どちらもアメリカ議会図書館をはじめとした海外機関による貴重資料の収集先として重宝されていることが窺えた。

として有名である。またその一方で、ガジャマダ大学をはじめとする多くの大学を有する学園都市としても名高い。

観光客向けの土産店などが並ぶマリオボロ通り近くに古本屋のコンプレックスがある（写真3）。鮮やかなオレンジとグリーンの色使いが眩しい二階建ての建物の中に古本屋のキオスク（日本の駅で見られるような小さな売店の形態）がびっしりと並んでいる。建物内にはここが二〇〇五年に建てられたことが記されていた。一階と二階で相当数の古本屋キオスクが入っており、ひとつの建物に古本屋だけでこれほどの数が集まっているのは驚きである。さらに、これらにはキオスクを一軒一軒覗いてみると、どの店も様々な特徴を持っていることがわかる。雑誌を中心に販売している店、イスラム系出版物を専門とする店、IT関連の本だけを取り扱っている店など、それぞれに色があり、人びとのニーズをこのコンプレックス全体で満たしているようである。なかでも左派系出版物を中心に切り揃えている店は本当に赤色の本ばかりが目立っていた。このほか、古本屋とは呼べないかもしれないが新

聞のクリッピングを専門的に取り扱う店もある。「イスラム銀行」や「税金」「家族問題」など、テーマごとにまとめられたクリッピングの束がどつきり積まれており、圧巻である。

このように、ジョグジャカルタではそれぞれに個性を持つ古本屋などがひとつのコンプレックスに集まっており、それぞれに持ち味を活かして棲み分けがなされていた。筆者がここを訪れた際、大学生と思われる若者らが店の人に何かを相談しているところをみかけた。ジャカルタとはまた違った古本屋の様子を知り、古本屋のコンプレックスがこの街の学生たちを支える知の集積地として役割を担っていることを感じた。

● おわりに

以上のように、インドネシアの古本屋事情として実際に見聞きしたことを紹介してきた。大型書店の台頭が加速するなか、ジャカルタ、ジョグジャカルタでは多様な古本屋業のあり方が今もなお存在している。

最後に、今回様々な古本屋を訪れたなかで特に印象に残ったことを述べておきたい。ジャカルタの

パサル・ブク・ランカの店主の「こうした古い本を大事にするのは外国人だけだ」という言葉が強く心に残った。先に紹介したジャカルタの二つの古本屋は海外の図書館・大学機関が常連客となっているわけだが、古い貴重資料への関心が国内では消極的である実情を示唆しているようにも感じられる。

近年、インドネシアでは情報サービスのデジタル化が急速に進んでいる。インドネシア中央統計庁では最近の出版物のほとんどがウェブ上で無料公開されるようになったし、ジャカルタでは市民向けに電子図書館のアプリケーションが開発されている（参考文献）。技術革新によって情報アクセスの格差を取り払い取り組みが積極的に行われている。しかし、その一方で国内の古い貴重資料の収集・保存も引き続きインドネシアの重要な課題になるといえるだろう。

（とさ）みなみ／アジア経済研究所 図書館）

《参考文献》

- ① “Greater Jakarta: Governor launches library app.” *The Jakarta Post*, October 15, 2015.